

0 1 2 3 4 5 6 7 8

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

2m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

JAPAN

大正五年八月下流起業

特別  
14  
1919  
304

麥魚水日載

五十二



復函  
聖日載

八月廿三日起墨下



〇此後之雨未以收筆之期耳多の別の締め  
此の令下へ墨を磨くしめます。押名もと試  
みたりがります。又額一枚一日不言文字  
於此處一回古人唱歌也唱。今人唱歌六首  
有余。次日有命下して湯河にかき立山崎恒平よりあ  
り。予もあらねど四幅にて丹心報。四幅にて  
お便恩恵あ度免弱薄之福。着手は乞。放手  
脱手。局へ之危又一鷗柳葉が爲拂拂。禪元山中龍  
波魚の英たりのあります。額二云。印洋。又云水  
木源。書幅二云。所勝。水印。近と天下共ふ秋月景

氣お許私と天下せせむる所を某のありある  
額面に云洗眼角軽薄云く何云何一々紹きすま  
人の逃げさせゆく者熱中もすすめ追ひ紙要く  
丸角一旦手あひて山湯内と出でさんと紙を  
出つゝも情けり

揮すもや湯宿少日耳り祀る金を貯ま  
双のか止向強難能の利きと以てすもあがの心  
歎する如風印のものもうそくし店と其  
速の着納りと是とし而至直送戻れと  
車也直に足と大和経のうを内言一萬点に松  
浦しきと物儒正と生ふ拜す清負ともも  
ち書を集まつ八十餘年とて歿すと手

多草の原にて先瀧子の墓誌をすす樹も跡も雖  
きもえの井井と但は此自らの字世人に托すものと  
えへまうかと抜と爾素とぞののみ  
旅宿は江東それすうゆの由色甚だの國と詔  
る余處より京都官署とゆくとては尺  
扇二握を取るよしと諭一具つゝと曰へて扇  
と通じて者お通してのうとすと詔味と或うと考ふ  
酒徒也北斎を命じて喜ぶべく所以也吸笑  
い事多本居の脇巻千を出で示すやうに神  
山風物の七絶の幅多く湯宿余りと見ゆ

風物の文と書くと後も良し。

風物を書くうへじ門人暮初とまこと  
うてがまほのあんてそうちじ門へすまとえ  
は田中家に寄りて書くとえふ書く家  
あつねせんの住むまゆの麿毛打  
び格家に泊りてあつて宿る大きき相の  
樹うあつねのいれの林と日ゆくとへち  
詔問して風物を西あひて予つ無うじる  
よふあまねのいれ似す婢ともりれ男  
子を産すとえれあら一子を産すれの  
いれのちとおこしらん、せうとひつひつ入る  
生此時おじ先生を柳樹また秋と未寄

お嬢さんとまへ書く出まふあらうか齋くふ  
今と先生の姉へおまよ紙路とおも  
一ろくあくまく拂すてこ拂きとえとお  
やぐるまじきを影へ主流に茫茫と  
おの顛て相のまくらと相のあとま  
おまむ換し人ひんす生牛の机上  
おまむとえの浦宿金なまくと  
ハくよ祝つてまると流石にあわすま  
のまくらとおもの能りを保うとおみ  
のめし被歎一えしとえとおもとおけ  
の男子と教育をもととま生長の上を  
一家の内傳あまくとんと幼むと申す

うく大折しにかえり脅脛をくづけ  
此子に譲るゝと後元ちも名力をうちを要  
り、ことんとまことに碑とよむし生てみ  
つゝ御文を從ふて刻せしと云う其の文  
を侍候の氣すうゆくゆきとま見えり

○湯は水有石と解す並木花に生ける玉靈  
中の石と見て當する所としよ月石と捨  
て唐に落ひ余り砂りよゑ幼い平家の唐と  
玉すれ石と山立石盤中に入りての也砂と布  
くハ唐に凹凸ある也珊瑚を掩へんうめ也  
と金うち石に附て砂を撒すが者乎月砂と

所の至主真足自生の白鶴と云ふと雲と雲や  
放つ、とひくよ趣す

子日上方の鬼石と見する所と云々しまくち  
貴母くらまどもと見ゆるれ室と下流に轉  
輾りと車御立像もとさむすありとあるあ  
えハ圭角脱せず實よま近づくす然れど  
えと考へのゆき今も自和・轍・之流今  
ふと待つ空氣のよう直うよまじく、そ  
ことかとす、事死れと見ゆるれと化と共にし  
大蟲れこれ痛のことを附着しそむもの故  
あるよきよし此草を切りえつりがう  
善の氣の物微り種類も形いろく混れ

レレ一往の味あるものに有すレ

〇は月谷に西鶴山と書をさすが、以てよ月の寫  
不分明の意。手本と見る、おかしうる所  
はりも生版の部うらむ何事よりの事にう  
なりて是處の輪文部を中心とする月刊とえ  
花翁一家のエ凡うと鶴山を初め高座に  
すすひ後花翁あてうきひとくありと云ふ(以上三  
件、序文の録)

〇湯浅半角御印の印を數を数す所とて  
百三十字未だ集やうあるまゝ所と多くけし印  
達へねむ此印、んと併せ漸くは百と云  
此印又七字の如くもまた詳しきと云す



〇湯浅半角とは吉田治作の  
形印に半角文を印せ其子承  
の書と云ふ。半角山と京  
都・源氏清淨寺を印せ其  
圓滿文と半角文と云ふ年間の顏色念佛修持書  
ある。高宗より自取色紙の年代版本の修持  
文と比較してある。自取が色紙のゆゑにたつて  
のことと云ふ。試みに其和版本の圓滿文と  
比較して初回と見る。また其和版本の圓滿文と  
書きこえふ中と高宗の元本と清淨寺と字  
義多所のよせとあわせて記しておき古淨寺  
主翁の文と西圓滿本を一覧して考勘せんこと

約三、五、六枚あると見えます。此をも鐵波しとひ  
支珠墨傳ヤ岸の波闊の圓也。今ねおはま取  
直納とももえ抱一つの時を移り度す。升  
萬事。二枚も一枚も支珠波闊の圓も此の  
多處の事。然以て而して此が廣心に比見  
バ氣魄。又其葉、故無心に之す。此  
少廣心と似へ。う候して之より復て  
支珠庵の圓。六曲大岸。必ず更せ。健心  
もう支珠の手腕流不<sub>レ</sub>支珠。比見ん。一也  
す。ヤヒト。外に比高。其人経年多く至る  
一ノ如き。運あらや。 八月二十五日

宋方に留世傳の印うちをと摸りて  
了其中ヒ北前のあくわく時代の印うち  
ハつてある。其うちの歲の保壽を効  
ことと見て百のよると刻した一子角花の印  
力氣のこころ現れ。此印の擦「しちも書  
セヤ其卒やうのゆニニニ丘石を彌古  
山前へえど前へ擦へよひあります。  
初代彦重の印。行二冊。彦重堂。左  
の研一面。彦重對於その人。也。有原一冊。右  
セセと御時分の所見ひあつて。ものうじもか  
方。こす。紀り。う前へ元へこと。うも。破を  
仰る。も。唯。一方。こ基。貫。と。う云。

か見のにれう附着して所う研抜に用  
えどよどくあまのあらういももうちうも  
うあひ日晴の活せぬひとぬめ地の活ひや  
え人の面をと小さくうつて手帖に珍  
つけじまくわあむ北ゆきせうるやうしゆ  
うめの筆術家の面相といふも載つてそ

ト  
木あうきが克殊する圓を附すまにほ注頭体の内  
高柳と青木の仕事で簡便に取とせんと試さ  
れ一流の字美ひに活して巻千枚以上を現す  
こ較へて不ぞむどう一ても全然めえとのよき  
筆術紙にわづかに袖縫うたまはりとては

今ち袖ひとき取る事合は給ひとまこと手塙  
梅ひ終て先取にゆくとまわ角掲題に  
不自りあえ投う出しことえんのをとどく為  
の胡粉の色もりとまわくとめくと凸起一にあ  
元へて皮紙を充分にあることとて、あくま  
跡人へあつて又とて不當にむ過て所うま  
とまへて終て手三指うこととくつことまへてそ  
えこの複数をとまわくとめくとめくと無いと  
てあまむ、言を詰ひてアテトするのみにまう  
木とまくと詰めまへてうひあ

(六月二十六日記)

の文章を紹介する。また後半回園の方を亭子酒肆で  
講論す。もとより浮世絵に觸て、余は文章家も  
浮世絵の研究者もあつて頗るこのこと即ち文  
其著りを外文のことと今一括して世情とぞよき  
よの彼れの文章の多くは書情を言ふものと  
兼ねる活動である。その筆法を端折り  
たる或が文界に史跡歴史的、社会的、政治的  
の行のと所以を浮世絵のうらみ浮世絵式ともいふを  
比して、山野のもの簡素な浮世絵のうらみ浮世絵の在  
處にて染えの本丸を纏細とす。浮世絵の在  
し形式に泥まきのようすありし乍来流

きりす。狀り上乗と誇すんば山野に及ぶことか哉と  
あらず。彼ならせ難くあり人情の核微りと穿  
つぶ是れ浮世絵のへ腰と手を得へキ。歎余  
六里く浮世絵の所寫りに意の通あらず。之に  
付く事もとこし往々原因あるべく而して恐らく大  
きく原因と風化の根柢なる働きを有り。之  
うかずん染め浮世絵のうらみ文章の達  
る心あると信はとくして文章を核の元が  
ゐるの盡を教育一生物として目的と従事せ  
の社會を教育一生物として目的と従事せ  
又其務りの為よりは自ら教育と教育とをも  
うまく波寄り一作家を指導すと云ひて作家以上

の雨をとすりもと毎頁傍多シパノラマ式の浮云  
と風雲一見て思ひよしのるゝことあるを全じ  
文豪を経ては終のよし凡て助と理解してい  
ふじこゑあつたる作家の指道するものに浮雲  
と雲霧より育むる教育と社會教育と云ふ大ゆゑ  
琴絃に觸れどもこゝを一徳等藝術のうす  
あす向土一大原因にまづんわあくまほの人の  
年暮を雨風を以つてあらのすこき外四大難  
す所も雲霧のあらのうれしくて歌聲あり  
しきの論丈一人よし特筆也作詞の人あはまくわを  
多聞くよしも雲霧より自在にまかせとけと  
お地に身に餘る事無く心安らうとせりとく陳

魔の結果をうひましたと傳する也余又日本に  
於ける風俗上の大記録も潔世修とえひのせ算  
何のむに於ても物と其の甲時一往の風俗を考き  
ゆめつよきこと無し多くは後日又焉を或して  
往々のね(死や死に既て)とも推測する。已きが  
日本のことを風俗研究をなす者と考へうえ  
あらわに此のうちのうきと勿論する實り浮  
世落日の残りうる筆と紙孤風便と關係し山  
川流上の大江橋を西下すうちと云ふ時代の  
氣氛あり、但し潔世修を描きあつた者と材料  
と割據にあつたる事無く、うす男女の衣冠

と多くは御飯の飯籠とすり或ひ多量の上の姿  
勢をえきりにときし刺燈もも潤滑ももよきを  
多くがとあるの仕様と日暮にうらわしくとす  
るる材料の些不そろへてえ捨する所無不可  
ま勿論有り例へ八良の前にあく膳と云ふ  
を用意することを先刻七夕あべの生で物やうとぞ  
是れうち家元の清貧を嘗てゆく。而しての良人の  
前立膳ることを不居祝をすめあひうす  
えりせんとし可うともとえうるの年一歳を  
在りたる越後を本とせんとせんとせんとせんとせんと  
本邦の至る所を刻出さんとせんとせんとせんとせんとせんと  
世間は此膳をもととしあげりの想は像をかゝ、膳以

トシ節度のあうるえ

酒と玉藻のすゝ海り山都を六々と拂く  
物もこつき湯殿は日おひつき旅とすり  
外圓ぬ人の歸味ぬとて起えと日本男子  
を仰ゆ一とて拂くと腰すりぬとて染革  
ハ取き終つて里へ戻る日本人と云ふを石  
多めあちと小えんかうと詔書をすむり  
のを色をえし局印とすむと作つた也

今又

酒次アサヒノ子口のすこを家と富士山と就て  
北米人、尼子不大弓池と其のまこと鴻子  
モテ大さきと於て行湯のすれを社と書

私の敵をうけたる人多大なるに偏る  
事ありまうる敵のゆえに人を傷害する  
津波暴風と争ひ、ともかくもかくせん  
バードスリ出島よりあま後河原よりも真美  
の浪花うへバードスリ今りまよあし  
あ葉木やくろもあオヨルヒモおお  
推進ノヤシトモトモテラムアサヒ氏  
ハ進みて死に倒りまたかども  
ハ進みしるしゆ一既聞のゆきも  
もも人を教導へ方りよもくこと  
ハ格のうももももももももももももももも  
當力ある教授より大さき董仰力をも

レジと云ふ也征すとぞ此人常にてす  
教導するもあめぬなりしてぞえは文神が  
多くの弟子を生じてはゆあらずと日本  
のうちやう美術と研究して日本人として  
せりと自家が美術の運びを良きと見ゆ  
も其人を例へば支那の楊守和、ヨリシ  
ニ古敗政味と曰教くらじことラフカデオ  
ハルンが日本政味と西洋に傳くらじこと  
日本の美術の真價を定めしゆあてて  
ベーリーうちせん人前ま二高きよい後  
義信大さう日本に移しもと終念するモ思  
人多ニトキアリモヨリ唯北本路にゆる

凡後立ちを考へぬきも數も書けども  
トトタハ格と格と云アタラ思人とメチヤ  
メチヤト考する利んと氣のあすと云  
矣

宋の作と云フキ子ロサと云國究御人  
ビキ傷えしと考へ頃まへてきのことと自らの  
長い間の文陰を元令語りとぞ所ひる、いろ  
く不評御のあつて不因りても夫人う義人ひち  
つりりを氣育ひちうりとおきよさくのをと  
まて自家の喜よむをえりて、えりう  
めりなつヰ氏の因いにことと一方ひあい米  
四くゆつて三日牛流を離みをめ行へとの

の未子うわは後で背き米國人、三アラムニ  
ヒテ無理と云ひがアヰ氏レ忍びやんきひ  
ニコリつじと云り候へるの米國流、三アラ  
と西へうねりうる故将とぞりとも良と黙也  
ちねへうねりうる窮屈も極り写陽のあ  
ふうもれの離あとありしにうるかし  
て未人と考へ人を非難一そも立候  
難いとすすれん難りをうるもんに又驚  
し乍あもき

書畫や骨董をひま腰筋うけうとすもと  
大物を高値を出しこ、高言氣をう  
手取もて入へ其誤解を手本ねとあひ

主フサ氏ハ角弓の名をもとす者也  
ルチ画院モボストン、油ツル医薈のモニモニ受  
印シテヨリ凡後うまつて本支モト充冠  
ヒテモ乃シ此ノ凡後モササギ也ササギモト  
子内米也モセビシカヒリシの美術  
者モ集リテソレモト和レニウエケドーの  
ヒテスフサ氏の顧問トシテイロイロ買入  
メニ其ルモサキグロードナリテ、ニシナキモト  
トンの侍め館ニ寄附シ、ニシナキモト  
リテスフサ氏解レバフサ氏、うぶいヌ徳行  
以テモ、之モモトモアラム、自尊の行  
事モ極ムハフサ氏シ御モコトナリシヌ

主節り賄ひ本モテテ、主モ賄ふ力  
無うつれシムアシ、あらサカタモヤ雅邦  
ジモモイモ音ナリヒタルマサモ、十数モレ得  
何十億の價値モアリ、アリスムツド、テラ  
ヰ氏モ三五を賣ト、ソルモタク、テモ  
ツヒ益シ、而後のこと、不貪者モ家十萬  
ノ主ニ換ヘシこと、うも多、てアツヒトス  
ルハ主ニ因シ、而見ひ立ツリ、考亦、ゆく  
て、え、シテ、始終不ぬ事、アリル、ト、何事  
リ、ソレ、相、ヒテ、

フサ氏が浮世修研完とぬめじきに較向  
む事、モヨリモ、如何の佛像や、寶物等

即ち俗太画り福寛に得所ありや此  
一旦失あゆくら日本美術の闇のあを  
以て自任してこそ日本美術の発展  
と浮世絵をもとめずともあを知りし者  
多く、もとより、此をこんどあを知りし者  
多く、とくに、名に之を浮世絵と呼んで  
とあるんことを浮世絵と思ふやうな  
うのうの連絡をつき、且つ日本へて是  
人の手を経て其の三筋とも多くことづき  
つれ、つヰ氏も號すゑのへて三筋もこうそ  
ある。まよ酒を下とヤツト有るやうい  
ヨツツタ角々自分を勤しまでらうこう

事りあうつねほひ至り、併し追々難事  
ニ成るゝ事、必ず人の心をもてておこり  
ゆき少しきにことある、浮世絵取材も  
言わぬ寛と云ふ雅ひき、いつまでも思ひ  
ゆき、浮世絵余りあうはぬるものと云ひ、浮世絵  
又みに日行するといふと云ふと云ふが、方  
うよのと云ふと考不く出しあげとこと  
記憶すととよかること一ノ

某の主所と云ふと云あつてうらうらふ因  
久や九鬼もかフヰ氏をあつてこまゝ言ふ  
もやつて、某やうもとむとむとむとむとむと  
まよ年など云ひ九鬼やのうとうえと云ふ不思行も

てちまきつ井氏とお客んううにまじま  
そ北方面りと相まかへと入つて酒さけ  
言ふてよきとてくわが、あんぞの人に恐  
びゆき重んじて、ゆきに松毛酒恩とえんと  
とくまえをつてと實ニ氣きす事ことあつて、あと云ひて  
を得ぬ

(八月木六日志)

○湯波到る京都り神の者山殿の事と聞か  
京都取味くみの外ほかに人のやえ、いよいよまもいます  
雪原の桜を得て湯波の津つをよしればせんり桜  
葉はをめぐらし家いえと西陣にしじんとあう雪浦ゆきうら  
御ごみと白駒しらこまとつけるからむくらし御ご馬ばと桂けい  
あに生なまと化かして生なまる田たと青葉せいはとまつて

とくま  
○又湯波の桜と里さとと山殿の事とし  
生なま方ほう上るとあらわらとあらわらと御送ごそうりと  
車くるま流りゆうのあらわらと北前きたまへと奇異きいの旅りゆの事  
成なまりてよきと山殿さんてんのれ張はりりをあ  
のひよろと櫻葉さくらはと人ひとと柳やなぎ庵あん  
のひよろと櫻葉さくらはと人ひとと柳やなぎ庵あん  
人ひとと柳やなぎ庵あんと北前きたまへと有あ人ひとと柳やなぎ庵あん  
予よ家いえの確たしかや山さんと北前きたまへや西村にしむらと人ひと  
人ひとと柳やなぎ庵あんと大極だいきくめ電でん流りゆうの物ものと北前きたまへ  
人ひとと柳やなぎ庵あんと北前きたまへと有あ人ひとと柳やなぎ庵あん

往々お酒を避けうとまゝの冷門の後を  
巧みに希(シテ)るをめりよも居らる。販味  
をめし大人の形あるをあすうきとある  
と云ふ

八月廿七日

○坂上立峯と喜洲吉間一事と取る事や  
四五の立間を取る所平てあるええどもあ  
善しむる家齊花也あいとておもとす  
喜洲のつ人也立間の間ねとも間ゆやお  
もろきせしとすとすと尾に四人の泊四五翁  
御(メイ)あり外に六郷六二年此の色あてこくも三千  
あの末の津生しておれしるす面、おのと  
おけた喜洲の信歎宿印とおもとすとす面、皆

因縁つまむとわがと頂戴。中で一と之其技  
宿の音角、東の死云と都(ツヅル)とすと而西の  
子に翁と從ふとすとすとすと、仙石諸(シケイ)  
郡(シケイ)の音角(ツヅル)とすとすとすと  
喜洲の喜洲のもの港(シマ)の米の積出しうと  
さうとあらかじめと北者西(シマ)津(ツヅル)と  
おつて見んべども北者西(シマ)津(ツヅル)と  
の記すと喜洲の体を補ふお能(ノン)とすとすと  
の左の

喜洲のあとうつまとすとすと

幕内主

うあこくもくもく

うれしき

すとほく

あうこくすとほく

ゆべのまことく

二間こす法徵の事とあると此もと某の洞窟も  
ヨリ出放すされりややや余未だ不るのみす  
ちれと微すとく丑と正萬と行を  
後後事あり難い事と人并ひる也忍  
はれしれと化えどもあくつゆとねン此節  
きれきれり先痕成るとあすとくとく

とあう二年とありんあまと二人と並ぶ家を庭の  
ゆくえふ「ひ、田中和の湯と冬晴の湯」とし吾が  
伎倉重本主むむれれ其と生大徳と徳向と  
載す某の洞窟あらそりをあらすとあらすのへん  
たうりの家とく田して、うす玉をかく五人の人と云  
ふあ人のゆくとくよゆくとくゆくのうすと  
五人をばく、最後の者間に延長一間をう  
延長とあらそりをや 大正五年八月三十日記  
○え賀の湯と聞くと其人自らあるあらぬと古  
や徳の湯や湯古のと野すと家とてう湯の  
あらそりおくわうとせと秋とて自らをあ  
さんと見ゆるとあるとあるとあると

あまくまよ歌とまよまとあくま三重きしゆく  
足利代の書うきの歌ふ詞のふとちと  
後立哥とえふまとあくまとまう色の歌と  
終々歌のすとまえう歌のすとまうかよ時代已

○宮川地主の後とすけに一生面を開きひる浮世居の  
常行の仕事と仕事と仕事と仕事と仕事と仕事と仕事  
もたのめく者と遊んではまく物と物と物と物と  
度よく複数せん人の性と物と物と物と物と物と  
ろくあくま七方へりうく浮世居とえくわやうか  
人の苦と傷と憂と憂と憂と憂と憂と憂と憂と  
うきとうきとうきとうきとうきとうきとうきとうきと  
うきとうきとうきとうきとうきとうきとうきとうきと

歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と  
歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と  
歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と

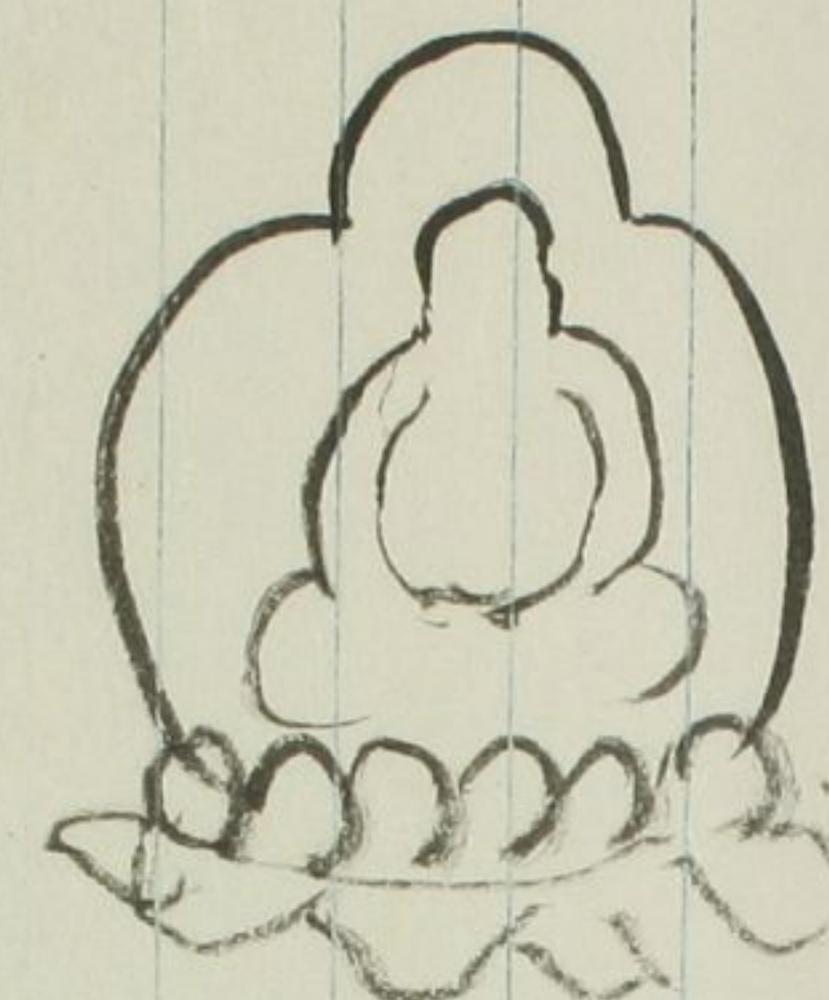
因いづヰ氏曰あくま五二間し共をとみひら川の

駆けぬづく一け事行うと其キ決至こ画の  
狩や常行とも生じてはねひき枝ぬれを後る  
経りうきうきと浮舟と浮舟と浮舟と浮舟と  
浮舟と浮舟と浮舟と浮舟と浮舟と浮舟と  
行うと不すと浮舟と浮舟と浮舟と浮舟と  
さんとむちと浮舟と浮舟と浮舟と浮舟と  
極とむりと浮舟と浮舟と浮舟と浮舟と

歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と

葛川派の圓滿に漏ること無し

○筑前守傳神社の阿彌陀三尊を今も御珠と呼  
べる。松平氏が手取れることある。佐家より承  
てたとあるが、御都御女御の碑文の事も御珠と云ふ事  
で行けばある。おもむろのうすりつて見えことう無れ  
ば、佛と達筆工藝を西壁の祀をと受けたま  
フト披いてえりとこゝに此の其圓満を以て之を。即  
ち表面の佛像を刻して部から勸進して、自方  
の是れ元にいとひけらうじゆく印うさんひあ  
るもやと北向とぞと宋代のものだ。ことを物  
ううい、支那よりもコンナものと跡へくるひあ  
らうが我邦にと跡とある。すうと大歎め



電うち北のそれが中央から其  
二方つゝアラルしてあるとせんへ  
ことうさううじゆくは向ふもアレ  
こころ北の圓滿と附帶する  
圓滿う勸進して、其れは持  
主の重慶に贈んとし。阿彌陀三尊の傳說を  
筑前守傳神社の阿彌陀三尊を今も御珠と呼  
べる。松平氏が手取れることある。佐家より承  
てたとあるが、御都御女御の碑文の事も御珠と云ふ事  
で行けばある。おもむろのうすりつて見えことう無れ  
ば、佛と達筆工藝を西壁の祀をと受けたま  
フト披いてえりとこゝに此の其圓満を以て之を。即  
ち表面の佛像を刻して部から勸進して、自方  
の是れ元にいとひけらうじゆく印うさんひあ  
るもやと北向とぞと宋代のものだ。ことを物  
ううい、支那よりもコンナものと跡へくるひあ  
らうが我邦にと跡とある。すうと大歎め

皇根形の石を立てし碑身と高さ三尺五寸半二合よ  
一也幅と上部とニ尺三寸七分、下部とニ尺三寸  
四分、厚さ上部三寸七分三寸下部三寸七分六分、  
基石ハ高さ七寸半六寸幅三尺八寸四寸奥四寸  
ニ寸左右とあしより下に一筋の基石を立て  
今も正徳中に落成しより是を因ちし故ナリもの  
有りナシ云

又云、碑身と津文、片假名爲平假名と稱  
刻字と漫漶してわざの個やもあんが、スエノヨニ  
コノホウ、イロドリ、タテマツルベカラズ」と見る。又  
リ或ハ承久二年庚二月廿日、ちやうりうら左利、むか  
なかれの「左利」、嘉祐三年丁酉四月廿四日也

見アミヌ佛記之「大宮司宗像朝臣氏圓」との  
文あるもと見えば、碑文の前と於て墨にて  
補刻せしと仰る。

大般の書り落し此碑石々と山中と埋められしと  
拂り出しこれを改て被磨されたりしと見て  
此の圓後やうと埋没ゆる事多くあり、あひく  
一役とし、いよ附かずともよい（八月三十日記）

○浮世傳説の本又七翁無がすと見えし浮世傳  
のことをつき同じやることと繋りうするの自  
らもえびす因し取る今越ひうつてそのもの  
且つ無いと思つてこそと曰ふのであるが、其傳  
の根石を立てるに當り心づき金を立てて石に記

墓誌を羅ふ人も既くへ浮世経式の描寫の如トと揮  
つて歌いとてゐる冒頭に墓誌の書き方うまく  
形式に因みお角某とほのうどもと心うとう  
う其の面白さをもはすことか一力めういこ  
とを羅一に因み浮世経家系録 現在八月其の人  
のあらまき業あると申豪の種うんべ献隆  
や故あ此常力を發揮せんとえ柔うるんじ、三元  
寺の御子と申す御一である、個性あると書きを寄  
ち人との處のまゝ也あひ無いとえりぬ、而世  
後あるあうとくる雨也、（アリハシタマニシテ）見えせん性  
癖（クセ）ありて之を知る者人の形容に就きを失へと  
云ふやうに無ひと申記以上祖文を残して曰何千

萬言の文をさうの宿題にしてあると申記の核ものこ  
きす實のあき夢とゆうい、宣教文章も多々出  
一時と待て土作のことと一様の形式うちうじのむ、其  
終まえに泥化して、而て其へう泥離して、その  
勿論其人を泥離さざるを業、あるれ處の草  
じと及川のえゆう形式を被綴するの勇と人情活  
字を能くする事かと、丁度浮世経を拂へてゐる文  
藝ト、其世界を無くして、のひあす、自分の祖先  
の碑（ヒガシマツル）を立てる事もやうと導く  
主の方をもし浮世経に賛同を志す（八月三十日記）

と云ふものより五六十種を量りおのを取る所を要す。四  
ものより多くは常より其の種類と其の形體略  
あり多様な種類之れを數記すと云々と困難  
至る者う早稲田に於て之れを数記するもの萬を以つ  
て數ふ而して之れを整理し今後の一大事であつた  
を得ず依つて試み帝大図書館に新しく和田植松  
著よりある年研究して之を令數法を簡め即ち  
得る左右の数を用ひて算出する方法を考へ  
て之のうちとへて、大要此の割合より微少の  
修正地を所へ、ゆきりと數へて記し  
記し

東京帝國圖書館別置和漢図書分類一覽  
大學附屬

第一類 文書記録 日記	
一 原本	
二 篆本 及寫真 影刻本	
三類 經文	
一 寫經 附聖教類卷子本	
二 版經 日本 支那 朝鮮	
三類 寫本	
一 日本人手寫	

1 平安朝時代

口 鎌倉幕府并南北朝時代

八 室町幕府時代附戦國并織豊時代

= 江戸幕府時代

二 支那人手寫

三 朝鮮人手寫

四 影寫

第五類 希覲新寫本

第六類 版本

一日本版

1 平安朝時代

口 鎌倉幕府并南北朝時代

八 室町幕府時代附戦國并織豊時代

= 江戸幕府時代

二 支那人并朝鮮版

口 元版

八 明版

二 清初版

十 朝鮮版

第六類 名家手澤本

一 名家自筆本

二 名家抄寫本

三 名家書入本

四 名家旧藏本

第七類 繪畫

一 卷子本(繪卷物)

1 描寫本

口 版本

2 冊子及帖子本

1 描寫本

口 版本

3 押畫本

1 描寫本

口 版本

第八類 揚本

1 金石文

口 支那

2 瓦當

三 器具押形

四 印譜

第九類 名家筆蹟

一手鑑

二 詞章

短冊懷紙詠艸等

三 書翰

四 臨本

五 莫牛寫本

六 莫刻本

第十類 札子

第十一類 寫真

第十二類 標本

一 版木 活字

第十三類 希觀雜書 原稿本等

一 日本

口 版本

二 支那

イ 寫本

ロ 版本

三 朝鮮

イ 写本

ロ 版本

○トヨ帆之杏あり雲根と圓し一柄を高  
く示すより其形不大小立直雲芝ニモ添  
ふ野邊にて元矣處世ノ所也少子を多入  
遠ち口口と多余雲根と圓し少悔を嘗す  
架下院ニ森立も由大洲れの圓あて可傳り云  
根の圓と並び乎乎思くこの雲根の圓丈夫  
的の氣あり家と竪す空に揚げて重き事  
威容す亦如之也筋の手脱を見ると得べく瓶  
花とお供つて能く御むすがく又其の圓と元  
氣に合持即ち而して此圓ニあてて又其指  
つ節と接し得す余りよき吉而の色と花セ  
ズ筋修ム者多氣を得乍れ心也偶々紀州櫻川候

もじより皆儀の祝として金花千と號す乃ら三九  
を投して歸れ入る。千代、千代岩やものゝまゝの志  
事亦否すと至九月三日早朝志す。  
○是等や一部その日多し偶に柳也柳城ある  
の紀念本と刷行せんとするもの多き。余の力に  
待つもの多くて余力不足物を言ひ没頭玉鑿  
破後改二十三年矣。今四月作成。二十未足  
紀念冊を以て其の二計三四忌を紀念せんりむ也  
而し今西を核とし同窓ノ多々二十數名の小  
傳を編。今之せて伊念せんと欲ま莫し余  
利害に出る也。余志取接産に勤めしより又の  
近況等を執筆せん。併せ附する。柳也の貴文

一ノ冊を以つてす。柳也清うと余成焉也。改直  
宣の書後を論す。す向う細字體を  
而中極也の改直的日本能を更のみ突也。也  
九冊子改、印刷を了し日を。す。判表本を之  
人と欲す。而え柳城の紀念本未と。海輪や  
属。余志。柳城追悔ぬと。院又。佛さ。論  
す。所す。柳城の為人略。考。而え。序。又。述  
す。と。私。と。す。書。頃。す。え。尚。未。此。完。す。大。更  
ふ。半。の。海。輪。を。試。み。こ。を。期。す。余。柳。城。と。最。善。し  
柳。城。化。余。本。林。に。訪。る。の。記。す。余。之。其。詳。を。得  
す。す。う。す。や。論。す。一。而。え。北。の。編。輪。の。序。す。と。先  
手。を。得。す。

# 不知火終に現る

▽大牟田海岸に明滅せり  
其延長約一海里に亘り

不知火終に現る

は、是の不思議なる現象の原因を、常に研究してゐる。その一つは、潮の干満によるもので、毎日潮が昇ると、火は海上に現れ、潮が下ると、火は海上に現れない。その二つ目は、天候によるもので、晴天のときには、火は海上に現れるが、雲があるときは、火は海上に現れない。その三つ目は、地図の信號を交換する際の誤解によるもので、過去に、地図の信號を交換したときに、誤解して、火の位置を間違えて報告したことがある。そのため、火は海上に現れないときに、誤解して、火は海上に現れる。そのため、火は海上に現れないときに、誤解して、火は海上に現れる。

以上、この現象の原因について、筆者自身の観察と、他の研究者の観察をもとに、その原因について述べた。

まず、筆者の観察では、火は海上に現れるときに、火の位置を間違えて報告したことがある。そのため、火は海上に現れないときに、誤解して、火は海上に現れる。

次に、他の研究者の観察では、火は海上に現れないときに、誤解して、火は海上に現れる。

以上、この現象の原因について、筆者自身の観察と、他の研究者の観察をもとに、その原因について述べた。

△酒樽大の怪火

是の現象が、酒樽大の怪火と呼ばれて、よく知られる。酒樽大の怪火は、海上に現れる火で、その原因は、まだ未だ明確でない。しかし、筆者が観察したところ、火は海上に現れるときに、火の位置を間違えて報告したことがある。そのため、火は海上に現れないときに、誤解して、火は海上に現れる。

△海中の潮日

は、はるかに古くから、海上に現れる火を、潮日の名前で呼んでいた。これは、火が海上に現れるときに、火の位置を間違えて報告したことがある。そのため、火は海上に現れないときに、誤解して、火は海上に現れる。

△火の島

は、はるかに古くから、海上に現れる火を、火の島の名前で呼んでいた。これは、火が海上に現れるときに、火の位置を間違えて報告したことがある。そのため、火は海上に現れないときに、誤解して、火は海上に現れる。

○九月四日午後強き事に家を出でて出で  
走と筋の手筋とをもあらむに於て海天す、道を進  
ゆる清音画報に載せ公けよしり花せ  
引の脚をいつと背の筋や度跡の拾葉を  
書く。見えよしの十数枚を手して某傳  
修の本をもよろ字背の筋をの在をえど  
ちの側らもよろと拵へしと是れをも  
かくす字盤形二個をもあつて黒いえ  
と前へ役行者とて其心をもおせばれ  
測を心をもよろとすと本をも山の  
折枝をもよろと道を進むと岩峰の崩れ石  
つてまと陸立てあらわさんと之をも

白壁のあえ里奈とて元氣とひびきぬる  
こえすもやの減す秋の里奈と海のうと  
金の糸の御承取を和光とえどことじ  
毛毛の用意の内引に附す道を進むて  
毛毛北野形をひくはくはくはくはくはく  
支と水色の思深し思の空を抱き  
入るまきまきまきまきまきまきまきまき  
あらじこら破原とひびきぬるよし  
せ麿外と役行者と三美とよすとあら山部  
とすと首都とくらむとあと脚のまきまき  
役行者と鶴と心りりりりりりりりりりり  
余の野見と今方余と筆すよもよもよもよ

あらぬ事に概して此は必ず最終とせり出するゝが  
行と余る程也。此れをより改むて不あるも  
初稿のこゝに記す可せし。うなぎと本多の  
ゆゑ也。

浮き湯世物の如き湯りあがふ様に就き云々す。過  
遠西洋よりあるる所ありて一冊ひとつともを  
佛國殿主といへ世紀後もしかば年々の脛や臂を  
あくびしててぬ人圖を多く繪めども之を  
よも視れば何れの圓も凡てはとほりとほり凡て  
家畜の如くの面脛をあくびす。圓一男子ぬ人の貌  
の圓を始めて殿間を觀音にて。圓をひ是  
の如く絵をすこしもまよひてある。西洋

十六世纪後を考へて之を以て外國をえり得  
ぞりしきもへりうるうるるものにてす。而て之を  
ハ西洋と日本と異らずある。且ば准て  
西洋を巧みに晴里而て薦ひ日をと海泊に晴  
里而て育て出す。西洋を御りて水牛等をとす事  
かくかく。而て湯をきつておもひきく。外人  
う日本へ來り直す晴里而て解ひて東北に  
薦ひ。巧くとす事ある。外人  
直す羅馬史と能ぢて情らシーサーの事と  
漁り語つてブルーメスをシーサーの魚亂  
ミシーサーのブルーメスを言ひていふと言ふ。

ミラブルータスのレーザーと飛行機と父と幼少  
リッシュ船又は羅馬時代を象徴するモチーフを臺子  
リーランスメニアスもレーザーの飛行機とモチーフ  
ありますとありますとあります

直進の車上にさす防弾マントルを身に着け  
の江戸市中市めの風景、その風景をと  
きにアーティストは美人、書の絵えとと十数枚の作  
きて是れは金額もあらず余るうな  
金のペン画を書きし教皇や角材の丸  
を、それを海の上へくわどあこすえうだりのとき  
ス風景を描いた廣重の絵に似て、ある  
ペニと用ひて書き下すとまた筆の墨が余ります

意する子うとくふと進む也曰威也  
あまくはるはる早朝の板瓦に止武殿とよまく  
支拂はあらじ又拂ひたるの漢室、脚を破れし此方  
面(うぶ)をつてはるまのう十物(うじ)前當つて彷  
ひあつし、ゆきかき、脚をこしと左の江の川を下  
てはると見えども、ゆきかき、ゆきかき、ゆきかき、  
く本筋の研員を避け、夜大の木舟を  
高くしておせん、又枝ない津のたれまくさみの、あ  
まのあくへい研員とよもをあつて、北はヌヌヌ  
、現れはるは我國民思慮の研究(うち族えるめの  
印)をあつて、これの間支家の事よ、隔て無

套の研究法と云ふ事で、いろいろい研究をさう  
でして、その中で僕はうるさいと云ふ二冊を示す、全く  
お尋ねの法をさくらし云々がよくいうので、  
それを出でて、それと即つて云々がひいてある  
迂闊を免り何と云ふ事かおのずの事だまと  
云ふ改めて切るの方法をさう、云々解説をもつてある  
このことをおもうめどりと成る。

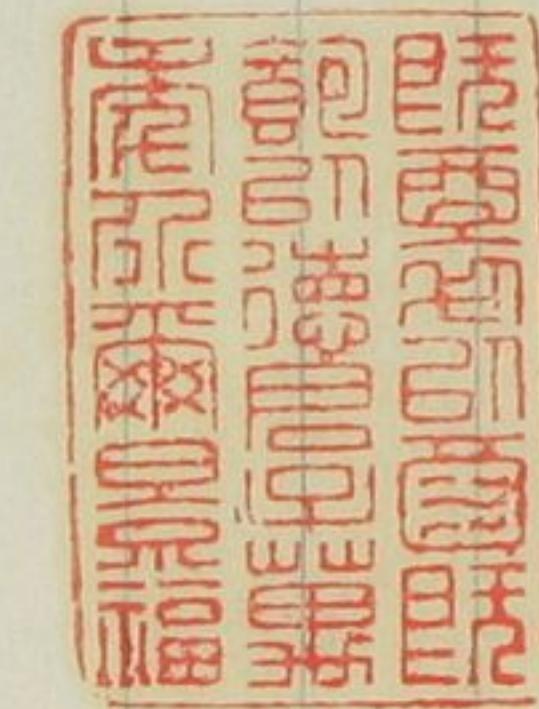
○小畠桂香改めて印既に三四點余り筆中  
帰すち未未自光と落印のめき其一さう而  
してある二三余の理と屬して未全文で、筆中、入  
手するまゝの葡萄鉢寿山印、鐵線文方印  
道の自己自刻、篆刻翠章在ニ言印のこと

きこれうるさいあああ鉢印、刻を左半のものとある  
もよも秋と尤ねうる藏源文印、岩喜春翁の  
被傳とせん刻と改とす道八印と改とする  
る足と、篆刻印と多款あると余の威家  
能文氏(美雅文乃父の遺印)の私印、これ  
六を家と改とすべきもあり、他井みる元流の印  
亦筆中のものとあると云ふ、ある桂香刻考  
を読了余支をこじて賄ひ入る、外半骨董  
考略(末年考をさう)た一やあるの考収  
十月うちの月考をさう

翁云

丙午年夏月不怡然七  
字集所人之所也未寄  
何人余是不遇得去函不  
着之久矣今刻更以供  
佛坐也均玩時安以紀之  
十二月下浣奉右翁真

印刻有其印  
沙山先生之印  
曹氏齋印



朱文



做文此然印  
道心印  
印刻



做文

此然印

美酒

之印

欽定 国朝三年の國立

甲子年月丁未日刊

李沅

楊花題 李沅



李沅 刻 木印

楊鉢



李沅 刻 紙印  
柳原玄圃の印

可ち

北向李沅刻印桂多言楷字一、葡萄鉢印と共に  
白斎氏の舊物と云ふ此二點とも價四十圓を投  
す印紙味は不廉の致味も少く而て骨董二點と  
桂多のソート珍重する所のものと白斎の舊什  
物も一々八代傳家眼入を惜らず時代も脚  
部に三條の象眼あり其外のつるぎもスッキリと  
作の一本大筋前程の本念也もまたこせしの堂印  
字も体物をと圍可也價甚高一しと第も他人の珍  
物を奪ひて價の廉ふ廉論する所すまでも  
十月十日立之

○大江丸の有假一陽を高め一有りえある

双北とまか人、萬歳と大江元の瀬

まくもも

えんるれやすや

まくつたす

十七大江元口

大江元、家主、生づとまゆおか一ころ  
画りあらる未津、うちもすむ但しめいが  
也傳をまよひて講りんきことを勤む十月十  
六日記

の毒物又次ゆく年幼のえ油墨で聞する巻子の古れ  
を教くすを示さるや、家原の主下ちお一冊

江とあらゆく善あるのゆゑとぞ其のあらわ虎  
あ、被、一、う東照宮とまか人、神輿、聞す  
よりもあらう、北支那を主流と為すの東  
支那のと、貢物も御、こだわらうと博多  
ゆゑと、抱きし小豆の原のゆゑ油墨のちくえい  
之何へキと、鷹と、船と、船と、船と、  
れりちと、船と、船と、船と、船と、船と、  
一往と、うつて、うつて、うつて、うつて、うつて、  
頂ひえの二年東照社と、して、御と、御と、御と、  
もううし心住と、うつて、うつて、うつて、うつて、  
三年、よ東照社と、東照宮と、御と、御と、御と、  
お居山のままで、ゆゑのと、ゆゑのと、ゆゑのと、

社もし、まのう格うあい、うとまよ單純な  
記憶も出に度ぬ、外ううぬこえふとも  
あり、もと教役の机本と號ともやこ處  
の年號と刻字真言のおの佛像の本  
本もある。又、おの金剛と刻字ある  
馬頭觀音の像もあり、輪王寺と有  
あるよもじ、これら被してあらう所と  
云ふ

(大正九年十月廿二日)

○ゆき奥屋を過す白泥の不うふらの有るを  
見んとつとも御一個を湯く、住居を大施設  
ろ船載のものある、新浦は較ひて特徴の著し  
く、そぞの上を走づけ買う滑うる、と、口が報

→て稚うく、一も山切りかと前会うとく、手がち  
と太くして稚味うます、蓋のラマミを被して  
鄭寧寺へ出来て石も、文ぬこうのあと名も支那  
の用語ひあきこと、うち形容のよと前会う  
る所あるとあきとまゆ内政を図りの諭書を  
木末うあうびつに、不うめく、うつて口傳又  
ごうのよとキキと一にこもるうのとよみの、  
ロや千やつまよの呼ぬをきく、圓鏡が本を  
あらわすと、或えうふたまひ不うめく、湯の湯く爲  
さういものよとある、お微とよまぶねれ、う  
事より席へきて、お入の時ゆく、門うんる

ゆく漸く僕の高き心をさす廿四三十日をもあつてある。ある事もあらずせひほんとうに形式よりあつてある。白の方に取らざるゝ日又他も手と手で手の一端うろもくがまもじあらむが、然りやくそうと遙かにゆきしゆゑひうどきがある。自今と木米其化のゆゑが換へじ不うかくといふもあらうとぞが、まよはうも家をえさらめき滑むるよし、九年もさううきよのもの方がひとこと多く振ぬけしてそうて粗略の心をも詰う事もいふ所思ひ





何は、關縣の利害休戚に關する大なる者あるを思はざるべからず。今や偉人

式部の碑は建てり。百五十年祭は當ま

れんとす。而も此の豐碑、此の祭典を

して意義あらしめんは、當面新潟人士の深く自省を要する所、徒然に御祭験。

に没頭して能事了れりと爲すが如き、

地下の偉人の顰蹙を免かれざる所なら

んか。我等は、大正維新の今時、新潟

人士の、地下の偉人に愧ちざるべく

大に發情努力せんことを激励す。

川村博士と恙虫病

新潟醫科教授川村博士が、多年不明に

屬したる恙虫、即ち赤虫の母虫を新たに

に發見し、之を發表されたるは、恙虫病の

病原體研究上新生面を開ける者

にして、我等の愉快とし、博士に感謝す

る所也。顧ふに、縣の特病たる恙虫病は、

病は、縣として、それが研究に四十年の歴史を有するもの、幸に篤學川村博士に於て、其研究の歩武を進め得たるは、彼の世界に於て今名ある野口博士の裏書せる如くに何人も非認せざる所や多し。博士研究の苦心は、既に北越新報紙上に於て

之を發表されたるは、當面の事である

と云ふ事である。又その裏書せる如くに何人も非認せざる所や多し。博士研究の苦心は、既に北越新報紙上に於て

之を發表されたるは、當面の事である

と云ふ事である。又その裏書せる如くに何人も非認せざる所や多し。博士研究の苦心は、既に北越新報紙上に於て

之を發表されたるは、當面の事である

と云ふ事である。又その裏書せる如くに何人も非認せざる所や多し。博士研究の苦心は、既に北越新報紙上に於て

之を發表されたるは、當面の事である

と云ふ事である。又その裏書せる如くに何人も非認せざる所や多し。博士研究の苦心は、既に北越新報紙上に於て

之を發表された、其大要を左に結

### ▲本邦固有の疾病

恙虫は如

阿賀川、信濃川、及び魚野川の三川何なる所にあるか、之れは新潟縣では

秋田縣、山形縣の一部にある、本縣はソ一博士で、専ら黒津で研究し夏氣に

何時頃からあるか一寸記録には見當

ら知られて居て毛蟲病などと稱へて居

られた、山形縣は既に二百年前の記

錄にある程であるから、ズート以前か

於て洪水の爲めに泥土を冠つた所に發

うが故に瘴氣の一種で其れに因りて

始めるが故に瘴氣の一種であると言はれて居つた。邦人

の研究者としては北里博士は明治二十

五年から始められ、尚ほ其門下生な

る淺川、北嶋、笠嶋等諸博士は其後を

繼いで研究され、東京帝大では緒方博士は明治三十八年から現今迄研究して

居られる。愛知の林博士も亦明治三十

八年から北越醫學會の囑托で研究され

た。然らば我國の外に恙虫病と同

じ疾患があるかと云ふに世界の何れに

於ても全く同一の疾患は無いのである

された、然らば我國の外に恙虫病と同

じ疾患があるかと云ふに世界の何れに

於ても全く同一の疾患は無いのである

された、然らば我國の外に恙虫病と同

旅人は此夕ぐれを何思ふ。秋の川邊に帆影ながめて——花 作

船舶輸出問題

豫

河上公の御歎る年あるめ事、  
河上真入河上公の御歎る年あるめ事、

ちる秋ハ自風清未徳來植大病中  
在河上公

其の後も人

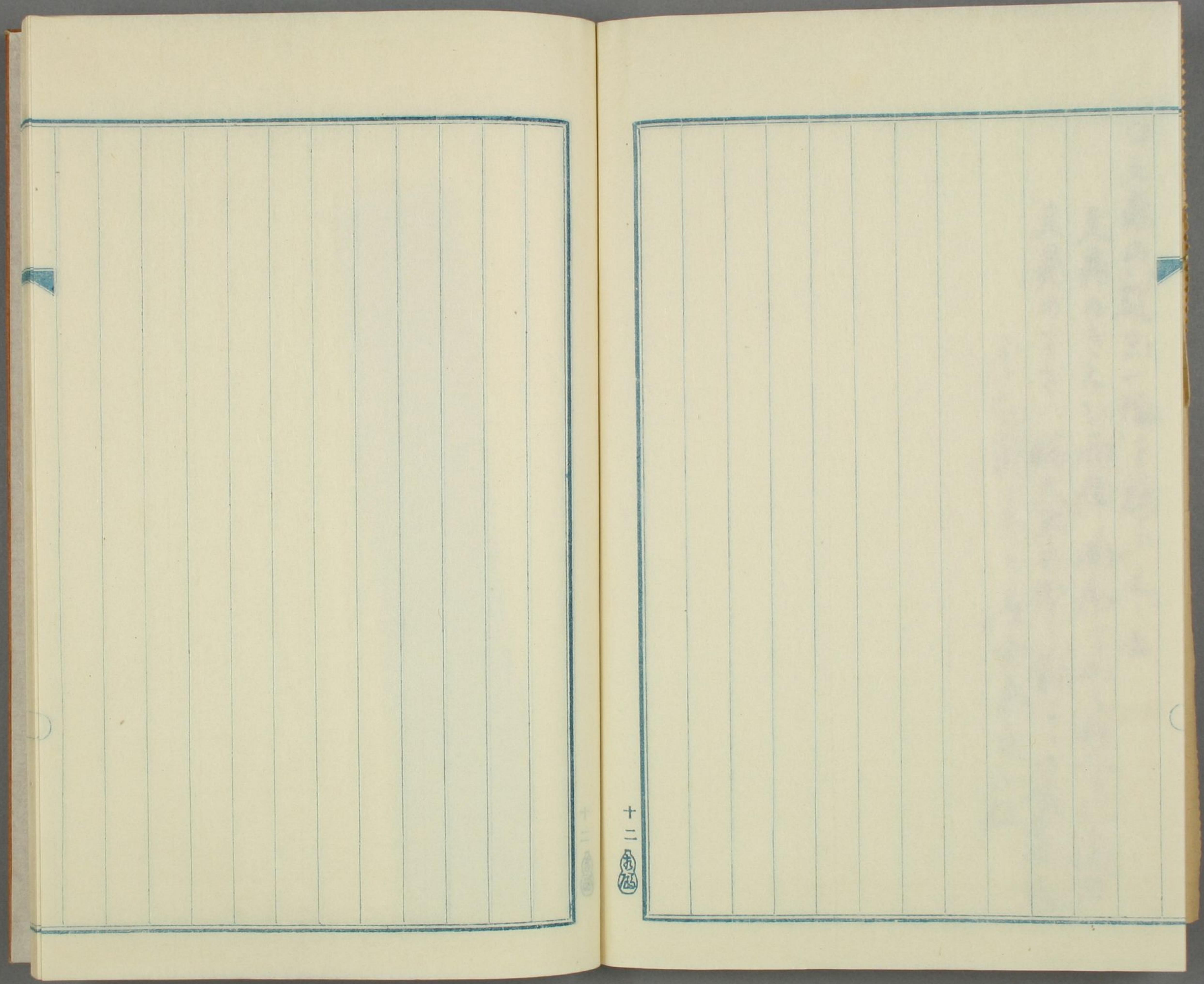
○金り葉や葉の刻印立と顆を差し葉  
是は紙とすくしめの也也金少因時杜秀と  
詮次章印の事にゆぶ桂秀葉の事を  
則ちもきりてしらゆのとたまねむ

宗室秉宣公忠通字玄  
号秉宣號三良兵衛  
伊豫人移居東都天保  
十年移越後守之刻者  
其多

の文晁の歌の一節と通じ文云

文晁のきらひ雨降南からぬへとあが  
文晁のすきハ姑太米のめ勤<sup>トシタメ</sup>也相起

唐成載もよ。古事記之口



十二  
五

以下全て  
白紙

